

優 秀

— 第一部門 —

いのちについて

戸^と

谷^や

百^も

花^か

ず、とがんとおいていたことばをたくさんかき
取した。これに気が付いて、とがんとずくとなく
さんことばをかんがえていました。

つたんとずくと、くちをって、なけれど、うれ
しいとまゆかひをし、きこちをたすのふたど
いふとがんとがえり、ました。

づ、とちいさ、ことばにじょうとうでまいたる
たをたのすまど、あたまのなかどうたつてい
ました。このあはれとがんとはあはれどうた
つた、といます。

たけとことで、わたしの、きが、とまつけま
したのしとまゆかひことばに気が付いて、
たくとさんのふたにたすけられぬとがんとま
たので、かんしやとこのばんとがんとがた
せたいとがんと、といます。

わたしのようにはたすきのふたつとまゆかひに
わたしのよりにじがたけまるとはたくとさん
まゆかひのふた、そのふたをたすけがたつた
にたすき、たすけはたすきとまゆかひのふた
といます。

わたしのいのちには、そのいのちの光が、あきら
かり、
あきらまう、あきらまう、

いのちについて

戸谷 百花

いのちについてかきます。

わたしは、23さいになりました。

4さいでびょうきのために、ねたきりになりました。それまではあるけないけれど、かぞくにはわかってもらえることばをはなしていましたが、びょうきでこぎゅうがわるくなつて、きかんせつかいをしたのでこえがでなくなりました。

ごはんはいろいろからですが、くちからもすこしたべます。ごえんをしないしゅじゅつをしたのでたべられますが、たくさんはつかれるのですこしだけです。

ごはんがらくになつたぶん、いまはいろんなことができます。

たいりよくがないので、じやえをかくときはくちからはたべません。たべるときは、えをかくことはしません。これはわたしがじぶんできめました。たくさんしたいことがあるので、たいりよくはひとつにしかもちません。えをかいなら2かくらいなものもしたくありません。とてもつかれてしまうからです。

それでもえをかくのはだいきです。

これは3ねんくらいまえにかくことをしました。

5ねんまえにじがかけることがわかってから、かあさんがかいじよのれんしゅうをしてくれて、じをいえですきなときにかけるようになりました。しをずっとかいています。

そのあとで、かいじよがあるときぶんがかいていないとおもわれるかもしれないと、スプリングバランサーというそうぐをつつけて、ひとりでかくれんしゅうをしました。そのとちゅうでえもかけることがわかって、えもかくようになりました。

ずっとねたきりだったわたしは、じぶんどうごさせることをしてからは、せかいがかわりました。

ずっとかんがえていたことはたくさんかきました。これはかけないときからずっとたくさんことばをかんがえていました。

つたえられないとおもっていたけれど、うれしいときやかなしいきもちをあたまのなかでいつもかんがえています。

ずっとちいさいときにびょうどうできたいうたもだいすきで、あたまのなかでうたっていました。これはいまかあさんにおふるでうたってもらっています。

かけることで、わたしのいきがいをみつけました。しとえをかくことがいきがいです。

たくさんのひとにたすけられながらいきてきたので、かんしゃとこのげんきなすがたをみせたいとおもっています。

わたしのようにねたきりのひとのなかにも、わたしのようにじがかけるひとはたくさんいるとおもうので、そのひとたちがかけるようになるきつかけになるとよいとおもっています。

なんどもしにそうになりましたが、いのちがたすかったのは、きつとなにかすべきことがあったのだといまはおもっています、きつとこのことがそれなんだろうとかんがえています。

ずっとにゆういんしていて、なんにんもなくなるのをみて、とてもかなしかったしこわかったです。じぶんもしぬのかとおもったこともあったし、そんなきもちもつたえられずにいました。

こんなふうにかいてつたえられるようになってからは、ひとりでふあんになることはありません。つらいときやくるしいことはつたえてきづいてももらえるので、とてもこころづよいです。

うまくつたえられるか、ふあんもあります、ことばがだせなかったときにくらべればたいしたことではありません。

これからもたっくさんのひとと、つたえることのでたいせつなことばでコミュニケーションをとってきたいです。

わたしのいのちについては、これでおわりです。
ありがとうございました。

戸谷百花

一九九八年生まれ 埼玉県在住



【受賞のことば】

ゆうしゆうしょうをありがとうございます。

うれしいです。

たくさんのひとにしろってもらって、たくさんのひとがつたえられるようになってくれるとうれしいです。

ここでこのようにつたえることができ、ほんとうにしあわせです。

これからもいぎがいをわすれずに、たくさんのひとにつたえていきたいです。

ありがとうございます。

選評

きょうも私は目覚ましで起き、ラジオを聴きながら朝食を摂り、電車で職場に着いた。その間、いのちについて考えることはない。でも何度も死の淵をさまよった作者は毎日、いのちの意味を二十三年間ベッドの上で考え続けたのだろう。そしてその思考は、自身だけでなく、周りの人々や同じ境遇の人たちへの感謝や思いやりにつながっていく。ことばや絵で自分の気持ちを伝えられる喜びに満ちている。いのちの叫びに圧倒される作品だ。

(鈴木 賢一)